

ローソトラベル 古地図江戸めぐり 5 吉原

浅草

江戸時代「観音さま」と言えば浅草寺の観音であり、庶民の信仰のメッカであると同時にレジャーの中心地だった。浅草が特に賑わいを見せ始めたのは、現在の人形町にあった幕府公認の遊郭・吉原が明暦の大火（明暦3年/1657）後に現在の千束町に移転してきたことに始まる。更に江戸後期、天保13年（1842）幕府公認の芝居小屋が浅草裏手で興行を始めるとますますの賑わいを見せた。明治になってもその勢いは変わらず、エノケン、デンスケ、渥美清、萩本欣一、坂上二郎、ビートたけしなどそうそうたる芸人がここから育った。

浅草寺

都内最古の寺で山号は金龍山。本尊はしょうかんぜおんぼさつ聖観世音菩薩。元々は天台宗であったが第二次大戦後独立し、聖観音宗の総本山となった。観音様を本尊とすることから「浅草観音」と呼ばれる。創建は古く628年、現在の隅田川で漁をしていた漁師のひのくまのはまなり檜前浜成・たけなり竹成兄弟の網に1寸8分（約5.5cm）の仏像がかかり、置いていたところ、この像を見た地域の文化人土師中知はじのなかとちによって聖観世音菩薩であることがわかり、中知は自ら剃髪して自宅を寺にして観音様を祀ったのが浅草寺の始まりと云われる。

大化元年(645)にしょうかい勝海上人が寺を整備し、本尊を公開しない秘仏と定めた。その後、天安元年(857)、比叡山延暦寺の僧・慈覚大師（円仁）が来寺した際にお前立ちの観音像を造り、秘仏の代わりに人々が拜めるようにした。このことから浅草寺では開基は勝海上人、開山は慈覚大師（円仁）となっている。江戸時代になると徳川家の祈願所となったが、8代将軍吉宗の「享保の改革」以降、幕府からの援助はなくなり、浅草寺は一般庶民との結び付きを強め市民の霊場として多くの参詣者を集めた。戦災で本堂はじめ多くの建物を焼失、現在の本堂は昭和33年に再建されたものである

仲見世

仲見世は江戸時代前期の貞享年間（1684-87）参道の清掃を課せられた付近の住民が、その代償として出店を許されたのが始まり。広小路と本堂（観音堂）の間にあるので仲見世

と呼ばれた。江戸創業の店や明治初期からの店が多く、現在も多くの外国人が訪れます。活況を呈している。

伝法院

浅草寺の貫主が居住する本坊。客殿は安永 5 年（1776）建立の建物で、仏壇には本尊阿弥陀如来像を安置する。江戸時代初期に造園の名手と云われた小堀遠州が作ったと云われる池泉庭園がある。

河竹黙阿弥

白波五人男で有名な歌舞伎作家。幕末から明治にかけて活躍、^{きぜわもの}生世話物（町人社会を描いた演劇）と呼ばれた歌舞伎を得意とし、伝法院通り南側筋に住んでいたという。

宝蔵門

所謂「あ・うん」の二体の金剛力士像が寺を守る門で、かつては「仁王門」と呼ばれていた。「あ・うん」は仏教の地インドの古代言語サンスクリット語の「a-hum」＝「阿吽」のことで宇宙の始まりから終わりを意味する。神社の狛犬も同様である。現在の門は昭和 39 年（1934）に再建された門で、門の上部に文化財を収蔵しているので「宝蔵門」と呼ばれる。

この門はチタンの瓦が使われている。チタン瓦は石瓦の 1/5 の重さで非常に軽く、且つ耐震・耐蝕で優れており、本堂もチタン瓦葺となっている。高さ 4m の大提灯は日本橋小舟町奉賛会から寄進されたもの。門の背面左右には魔除けの意味を持つ巨大なわらじが吊り下げられている。吽形を造った彫刻家の村岡久作が山形県村山市出身である縁から、同市の奉賛会から贈られたもので「この様な大きなわらじを履くものがこの寺を守っている」と驚いて魔物が去っていくと云われる。

本堂（観音堂）

家光が慶安 2 年（1649）寄進した観音堂は度々の火災にも都度雨が降り焼失を免れた。また関東大震災の時にも無事だったことから家光の威光が及んでいると評判となり、国宝の指定を受けていた。しかし東京大空襲で全焼してしまい、現在の堂は昭和 33 年（1958）再建さ

れた鉄筋コンクリート造り。本尊の聖観音像を安置しているので「観音堂」と呼ばれる。屋根には宝蔵門同様、チタンの瓦が使われている。

影向堂

影向とは神仏が姿かたちとなって現れることを意味する。生まれ年（干支）ごとの守り本尊八体が祀られている。御朱印所。

六角堂

元和4年(1618)建立と云われる寺内最古の遺構。「六角」という形は「六根清浄を願う」という意味が込められ、視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚・意識の六つを清めることができると云われる。ご本尊は日限地蔵尊。お願いに対して日数を定めて祈願すればご利益ありと云われる。

迷子お知らせ石標

「南無大慈悲観世音菩薩 迷ひ子のしるべ」と記され、右に「志らする方」、左に「たづぬる方」とある。安政7年(1860)、新吉原の楼主・松田屋嘉兵衛が、安政大地震による死者を弔うために建立した。その後、江戸市民の間で迷い子や尋ね人の紙を貼り、行方を捜す手段として重宝がられるようになった。石標は昭和32年に新しく再建されたもので、都内で最も古い迷子知らせ石標は一石橋東詰にある。

浅草神社

浅草寺の創始者である檜前浜成・竹成兄弟と土師中知の三人を祀る神社なので「三社様」と呼ばれる。浅草寺は江戸時代は徳川の祈願所であり、家康公を祀る東照宮が慶安2年(1649)に合祀され「三社権現」と呼ばれていたが、明治の神仏分離令により浅草神社と改称された。例大祭「三社祭」は毎年5月17・18日に近い金土日に行われ、多くの人で賑わう。今年「令和元年」の祭りということで70万人以上の人を訪れる予想となっている。かつては本堂から御神輿を担いで練り歩き、船に乗せ大川（隅田川）を渡御したので『船祭』とも呼ばれた。拝殿、幣殿、本殿が一体となった「権現造り」の社殿は、慶安2年(1649)家光か

ら寄進されたもの。震災や戦災などに耐え奇跡的に残り、江戸初期を代表する貴重な木造建築物として国の重要文化財に指定されている。神社の紋は三人の投網による「三つ網」の紋となっている。

※びんざさら

「びんざさら」は田楽に用いられた楽器。長さ15cm程度で薄い檜板を108枚連ね、両端を持って開閉することで音を出す。この楽器を使った「びんざさら舞」が三社祭の初日に奉納される。地方の民族芸能「ささら」「こきりこ」も同じものである

被官稲荷

伝法院に新しく造られた門の番人・新門辰五郎の妻が重病にかかり、京都伏見稲荷に祈願したところ快癒したので、そのお礼に伏見稲荷の分霊を勧請したのが始まり。安政2年(1885)建立で祭神は倉稲魂神^{うかのみたまのみこと}。五穀豊穰をはじめ、商売繁盛・立身出世・芸能上達などのご利益があるとされる。「被官=官位を授かる」ということから出世を祈願される花柳界や芸能関係者の参拝が多い。

(参考) 新門辰五郎

江戸時代後期の町火消十番組の組頭。輪王寺宮・舜仁法親王が伝法院に隠居した際、上野に行くのに便のいい新門が造られ、その門番を命ぜられたので新門と呼ばれた。娘は15代將軍徳川慶喜の妾。辰五郎は幕末の鳥羽伏見の戦いで慶喜が大坂から江戸へ逃れた際の警備や、上野戦争時に謹慎の身であった慶喜の警護などを務めた。

二天門

家康公は浅草寺を徳川の祈願所と定め東照宮が置かれていたが、寛永年間(1624-44)に焼失したため江戸城紅葉山に移した。この二天門は、その東照宮の隨身門(寺院の山門にあたる)であったと云われる。現在の門は慶安2年(1649)に再建されたもの。

明治以降、神仏分離令により門に安置されていた隨身像は、仏教を守護する四天王像に変えられ、南を守る**増長天(左)**、東を守る**持国天(右)**が鶴岡八幡宮から奉納され、二天門と改称された(西は広目天、北は多聞天)。東京大空襲で焼失してしまい、現在の二天像は昭

和 32 年、寛永寺墓地にある蔵有院（家綱）霊廟の勅使門から移された 17 世紀後半作のもの。

猿若歌舞伎座跡

江戸歌舞伎は寛永元年(1624)、猿若勘三郎（後の中村勘三郎）が京橋と日本橋の間道に芝居小屋を立ち上げたのが始まり。風紀上の問題から幕府公認の芝居小屋は絞られ、江戸中期には中村座・市村座・守田座の3つとなり「江戸三座」と呼ばれた。他に山村座があったが、正徳4年(1714)絵島生島事件で廃絶となった。

天保12年(1841)、風紀を乱すという理由から天保の改革を進めていた老中・水野忠邦は芝居小屋の取りつぶしを命じた。ところが町奉行で有名な「遠山金さん」こと遠山左衛門尉景元はこれに反対、最終的に現人形町にあった芝居小屋を全て浅草寺裏手の猿若町（現浅草六丁目）に移転することで決着した。辺鄙な場所に移ったため、当初は集客が心配されたが浅草寺参詣を兼ねた芝居見物客が増え、浅草界隈は江戸一の娯楽の場へと発展していった。明治以降、新政府は芝居小屋の全面移転を命じ、猿若町の芝居小屋は徐々に姿を消していった。現在は座毎の芝居小屋でなく、明治22年に出来た歌舞伎座で興行が行われている

※名所江戸百景『猿わか町よるの景』

人物の影処理や芝居小屋が遠くまで続く遠近法は西洋画家ゴッホなどに影響を与えたと云われる。芝居小屋のうち、一番手前に森田座の看板が見える。

池波正太郎生誕の地

大正12年1月生まれでこの付近（浅草7丁目3番）に生家があったが、同年9月の関東大震災で焼失。東京都職員を経たのち小説家となり、鬼平犯科帳シリーズ、剣客商売シリーズなど、数々のヒットを飛ばし多くの賞を受賞した。平成2年、急性白血病により67歳で亡くなる。記念文庫が西浅草の台東区立中央図書館内にある。

待乳山聖天

聖観音宗の総本山・浅草寺の子院で本尊はかんぎてん歓喜天と呼ばれるヒンズー教の神。仏教に取り入れられ夫婦和合のご利益があるとして広く信仰された。境内のあちこちに夫婦和合を象徴と

した二股大根と、商売繁盛を表す巾着が彫られている。大根は人間の心の迷いや毒を洗ってくれるので、大根を供えると聖観音様が身体の毒を洗い清めてくれると云われる。1月7日の大根まつりにはふるふき大根がふるまわれる。浅草七福神（毘沙門天）。

日本堤・山谷堀

日本堤は新吉原が出来る前の元和6年（1620）、浅草を隅田川の氾濫の被害から防ぐ目的で造られた。「日本堤」という呼び名は幕府が全国の諸大名に命じて造ったから、或いは堤防が二本あったからとも云われる。新吉原が出来上がると吉原通いの道として大いに賑わい、土手上には吉原への行き帰りの男たちをあてこみ、茶屋や屋台が多数並んでいた。（広重「名所江戸百景」）

かつての山谷堀は北区王子の音無川から隅田川に流れる水路。歩いて吉原に向かう人は殆どが馬道を使うが山谷堀は吉原への水上路として、隅田川柳橋から遊郭入口の大門^{おおもん}まで猪牙船（一人漕ぎ高速艇）に乗って行き来することが“粋”とされた。昭和に入ると経済成長に伴う水質汚染と悪臭が問題となり暗渠化された。現在は公園に整備され山谷堀公園となった。

紙洗橋「ひやかす」

江戸時代には古紙の再生が盛んとなり、庶民の生活用の紙として、浅草・京都・信州などの再生紙が使われた。買う気もないのに見るだけのことを「ひやかす」と言うが、浅草紙をすく職人が原料を煮て溶かした液を冷ます間に、金もないのに吉原をぶらぶら見物してことから出たと云われる。

桜鍋 中江

明治38年（1905）創業の桜鍋の元祖。吉原に20軒以上あった桜鍋の店で現在も残っているのは1～2軒と云われる。桜鍋は滋養強壮に良いとされ「馬力をつける」の言葉は吉原の桜鍋を食べることが語源となった。関東大震災で崩壊したが修復され、奇跡的に戦火から逃れることができた。文化庁の国指定登録有形文化財となっている。

手前の店は明治22年創業の天ぷらの店・伊勢屋

吉原・幕府公認の遊郭

幕府公認の遊郭が最初に生まれたのは駿府。家康が終焉の地である駿府城の築城を始めた際、全国から家臣や大工、商人など大勢集まり、彼らの労を労うために造られたのが幕府公認の遊郭の始まりという。

江戸に幕府公認の遊郭が生まれたのは慶長17年（1612）現在の人形町の北側の湿地帯を造成し1万5千坪もの広大な土地を廓として開業した。当時は葦の原っぱだったので「葦原」と呼ばれていたが、縁起の良い「吉原」と改められた。ところが明暦2年（1656）、幕府は江戸市街地の拡張や風紀上の問題から、浅草裏の日本堤への移転を命じた。江戸の外れなので客足が遠のくから撤回を求めたが受け入れられず、最終的に営業敷地の5割増しなどを条件に移転が決まった。翌年の大火（明暦の大火）で吉原が全焼したことをきっかけに新しい全店移転してきた。以来、昭和32年（1957）売春法施行、翌年赤線が廃止されるまでの約300年に亘ってこの地で営業が続けられた。

※青線は非合法で売春が行われていた地域（所轄の警察署では地図の色で識別していた）

吉原郭内

新吉原は横 355m×縦 266m 2万8千坪もの広大な廓を有していた。廓の周囲はおはぐろどぶと呼ばれた堀が巡らされ、廓の入口は大門1ヶ所だけであった。享保6年（1721）の記録では遊女約2100人、禿（10-15歳花魁の元で躰を学ぶ）940人 計約3000人となっている。

衣紋坂

日本堤の高い土手から五十間道へ下る坂で「衣紋坂」と呼ばれる。吉原に入る客が身なりを整えた（＝衣紋をつくろう）ことからその名がある。現在、坂はない。

五十間道

土手から吉原の入り口である「大門」までの道が五十間あることからこの名が付いた。外から遊郭が見えないように道はS字にカーブしている。大門に向かって道の左側には、現代でいう吉原のガイドブック『吉原細見』を大ヒットさせ、後に歌麿や東洲斎写楽の浮世絵などの出版で一斉を風靡したつたやじゅうざぶろう蔦屋重三郎の店があった。

見返り柳

吉原遊郭の名所の一つで京都島原遊郭の門口の柳を模したと云われる。遊び帰りの客が名残を惜しんでこの柳のあたりで遊郭を振り返ったという。現在の柳は6代目とされる

おおもん 大門

吉原唯一の入口で、黒塗り木造の冠木門があった。そばには番所があり、朝6時に開き夜10時に閉じられた。実際は脇にある袖門を利用できたので、客は深夜でも出入りできた。医者以外は駕籠に乗ったまま大門をくぐることは許されておらず、大名であっても駕籠から降りなければならなかった。

遊女の階級

遊女には厳格な階級があり、その待遇にも歴然とした差があった。遊女同士を競わせ、売上を伸ばす為である。宝暦（1751-64）の頃は以下のような序列（イラスト）であった。

呼出し昼三

花魁と呼ばれる高級遊女、引手茶屋を通して「呼び出す」ためこのように呼ばれる。花魁は多数のお供を従えて外八文字で歩く花魁道中をして引手茶屋で待つ客と顔見世をした

ちゅうさん 昼三

揚代（遊女を買う時の価格）が金三分（1両＝4分）であることからこの名がついた。昼三には配下に新造や禿がついて雑用をこなす。配下の禿が一人前になるまで面倒を見てやらねばならない為、古典や書道・茶道・三味線などを教える教養が必要とされた

座敷持

平常起居する個室と、客を迎える座敷を与えられていた

へやもち 部屋持

個室を与えられ、そこに平常起居し客も迎えた

しんぞう 振袖新造

個室はなく大部屋で雑居。客を取る時は共用部屋を用いる

番頭新造

上級遊女の雑用係で年季明け後に勤めるため、多くは30歳を過ぎていた。客は取らない

かむろ 禿

10 - 15歳くらいの女の子で花魁の下で雑用しながら遊女としての躰を学び、15, 6歳で新造になり客を取り始める

遊女屋

まがき 惣籬 (大見世) 半籬 (中見世) 惣半籬 (小見世) の3ランク

揚代

最も高額であったのは「惣籬 (大見世)」の「呼出し昼三」で金1両1分 (1両10万なら12.5万円)。しかし遊女を買うための吉原独特の慣例があり、茶屋への手数料、芸者への祝儀、飲食代、座敷でのカミバナ (1枚が金1分に換金されるチップ) など、様々な費用がかかったため、実際に遊ぼうとすれば揚代の数倍の費用がかかった。

かりたく 仮宅

吉原は幕府公認の遊郭なので、火事で全焼して営業できなくなった場合、妓楼が再建されるまでの間、江戸市中の家屋を借りて臨時営業をすることが許されていた。これを仮宅といった。吉原は幕末までに20件以上の火災が起きておりそのたびに仮宅になった。仮宅は江戸の市中で営業するため、辺鄙な地にある吉原に比べ格段に便利。それまで吉原や花魁に縁のなかった男たちまでもがどっと押し寄せた。借家での臨時営業なので改装にはお金をかけず、経費も圧縮できたので非常に儲かったようである。その為、楼主のなかには火事が発生すると喜び、消化に努めるどころかすぐに仮宅の借り受けに走り回る者がいたといわれる

岡場所

非公式の遊女屋で代表的なものは、南 (吉原 = 北) と呼ばれた品川や辰巳と呼ばれた深川などであった。品川は東海道の宿駅という好立地、深川は豪華な吉原と比べ安く遊べたので人気があった。岡場所の揚げ代は深川の場合、時間決めの切遊びで一切 (昼夜を5つに切った5分の1) が銀12匁 (1/5両) 昼夜通しは72匁、これが最高であった。

吉原神社

明治 5 年（1873）、新吉原に祀られていた稲荷神社と弁財天を合祀して創建、吉原遊郭の鎮守とした。祭神は倉稲魂命（うかのみたまのみこと穀物の神で伏見稲荷大社の主祭神）と市杵嶋姫命（いちきしまひめのみこと水の神で宗像三女神）

新吉原花園池（弁天池）跡

新吉原を造成する際、池をつくり弁天祠を祀ったので「弁天池」と呼ばれていた。関東大震災に伴う火災で逃げ遅れた遊女らが次々と弁天池に飛び込み、490 名もの犠牲者を出すという悲劇に見舞われた。戦後、電電公社電話局建築にあたりその殆どは埋め立てられ、弁天祠は老朽化したため、地元有志や東京芸大などの学生らによって壁画や彫刻が制作され、2012 年完成した。

おおとり

鷲神社

鷲神社の例大祭「酉の市」は日本一と云われ、毎年 70-80 万人もの人出がある。毎年 11 月の酉の日、午前 0 時に打ち鳴らされる「一番太鼓」を合図に行われる「酉の市」は鷲神社（元は長国寺の境内社であった）が起源発祥の地と云われる。創建は不明だが、日本武尊が東国征伐の帰途、ここで熊手をかけ戦勝を祝ったのが 11 月の酉の日だったことから、以後、この日を「酉の市」と定めたという。

「酉」は「取り」と解釈、熊手は「鷲（わし）」が獲物をわしづかみすることになぞらえてその爪を模したといわれ、福をわしづかみにするという意味が込められている。そこから酉の日に神社で熊手を手に入れると「福をかき込む」と云われ、商売繁盛の神として信仰された。この鷲神社の酉の市が多くの参詣者を集めたのは、浅草寺、吉原と言う江戸一の盛り場の近くという地の利があったから。なお、「酉の市」は転じて「酉のまち」とも呼ばれていた。

樋口一葉旧居跡・記念館・たけくらべ記念碑

樋口一葉は明治 5 年（1872）文京区内幸町に生まれ、学問や俳諧に親しむ家庭に育った。17 歳で父と長男が相次いで亡くなり、女手一つで母と妹を養わなければならない立場とな

った。一葉は吉原近くの龍泉寺町で雑貨・駄菓子なからいとうすいの店を始めたがうまくいかず、小説家で生計を建てることを志し、文京区本郷に転居、朝日新聞の半井桃水の指導のもとで執筆活動に入った。この界限を背景にした作品が代表作「たけくらべ」。以後、「にごりえ」「十三夜」といった秀作を発表して文壇から絶賛された。24歳6か月で肺結核となり死去。

浄閑寺（浄土宗）

安政2年（1855）の安政大地震の際、亡くなった多くの吉原の遊女が、投げ込み同然に葬られたことから「投込寺」と呼ばれるようになった。この寺に残る『浄閑寺過去帳』が以前、「ブラタモリ」で紹介されていたが、遊女の名前や年齢もなくただ「売女」と書かれていたようである。新吉原総霊塔は大地震で亡くなった吉原の遊女を慰霊するもので、「生まれては苦界、死しては浄閑寺」という川柳作家の花又花酔はなまたかすいの句が刻まれている。しばしば当寺を訪れた作家、永井荷風の詩碑が建立されている。毎年荷風の命日である4月30日頃に、寺の主催で「荷風忌」が営まれる。

※永井荷風はエリートげいぎの家に生まれた小説家。芸妓と交情を続け、私生活は破綻しかけていた。ゴミ屋敷のような家に引きこもり、この浄閑寺を好んで訪れ、自分もここに葬って欲しいと言っていたという

三ノ輪橋（音無川）

石神井川の支流として王子から分流した音無川が、現在の日光街道と交差するところに架けられた橋。長さ約10m、幅約6mであったという。昭和に入り暗渠となったため橋は撤去された。